伊藤祐靖 著
『「邦人奪還」自衛隊特殊部隊が動くとき』を読んで

杉本　順則　陸自77

著者は、日本体育大から海上自衛隊に入隊。防大指導教官、護衛艦「たちかぜ」砲術長を経て、「みょうこう」航海長在任中の1999年に能登半島沖不審船事案に遭遇した。これをきっかけに創設された海自「特別警備隊」の創設に携わっている。42歳の時に退官し、フィリピンのミンダナオ島で自らの技術を磨き直し、現在は各国の警察・軍隊への指導で世界を巡っている。国内では警備会社のアドバイザーを務める傍ら私塾を開き、現役自衛官らに知識・技術・経験を伝えているという。

物語は、当初、尖閣諸島に中国国旗が掲揚され、特殊部隊で国旗を付け替える国家意思決定のやりとりから始まる。敵の考える日本の対応のタイムテーブルの予測などが、多分そうだろうと思わせる。描写は克明すぎるぐらいで、映画のワンシーンを観る感覚で読み進めることができる。題名の「邦人奪還」は北朝鮮に拉致された日本人の奪還である。統合幕僚長ほか3幕僚長と総理大臣・防衛大臣と特殊作戦部隊指揮官の作戦会議におけるやりとりにおいては、溜飲の下がるシーンがある。国家意思、司令室と現場、指揮統制・情報のあり方及び軍法なき軍隊である自衛隊などにも一石を投じる部分もあり、自衛官として原点に戻って考えることが多い。また、「法が国を支配しているのは平時だ。非常時は現実が国を支配し、その現実に見合った判断をするのが我々政治家」というのは、現在のコロナ禍における政治にも通じるものがある。

ネタバレになるかも知れないが、この作戦では戦死者が出る。その各部隊葬に出席する政府高官の様子も克明に描写されている。その戦死者と残された家族を、国がどう扱うかなどの問題も行間に見え隠れした。

海自の特別警備隊と陸自の特殊作戦群が主人公で、特殊作戦及び海自・潜水艦のややマニアックな知識満載の本書は一気に読める本であり、いずれ映画化されると予想している次第である。

新潮社　1760円